

地域再生から日本再生へ！

人材を地域に取り戻す

「地元の生の声」

地元を巡っていて、皆さまの生の声に接する毎日です。最近接した声で言うと、例えば、

- 電気設備業界の方からは、公共関連工事の価格設定が低くほとんど利益が出ないこと、役所の諸手続きが煩雑で人手がかかりそれが結果として収益を圧迫していること。

- 介護福祉士の方からは、介護従業者の待遇が非常に低く、普通の生活を営める状況になく志はあるものの離職が相次いでいること。
- 専門リング農家の方からは、片手間でリング園をやっている人がリング園を耕作放



棄し、その結果周囲の農園に病気が蔓延したりして迷惑を被っているが、行政の仲介機能が弱いこと。

中山間地で農業を営んでいる方からは、鳥獣被害がひどく公的支援がないと中山間地農業を諦めざるを得ない状態に追い込まれていること。

精密機械企業の方からは、この地域の交通インフラが弱い結果、東京からのアク

セスが遠くなり本社との行き来に支障が生じていること、またこの地域から若手の人材を確保しにくくなっていること。

といったお話を聞きました。いずれも切実な声であり、こうした声を毎日のように伺う中で、地域の直面する数々の課題が浮かび上がってくるように感じています。

「人材流出の現状」

このような中で、松本市内のある大学関係者から、長野県内の高校生で大学進学者の85%が、東京をはじめとした県外へ進学するという話が特に耳に残りました。全国で7番目の高さです。

親も教師も、そして本人もできるだけ良い高等教育の機会を得たいというのが本心であり、県内にそのような機会が十分に無い

のであればそれもやむを得ないと考えるのが人情です。

しかし、立場を変えて地域の視点からこのことを考えるとどうでしょうか。

- ① 優秀な人材がこの地域で高等教育を受ける機会に恵まれない
 - ↓ ② 優秀な人材が働き盛りの時代を出身地域で過ごすことが無い ↓ ③ その結果地域は人材不足に見舞われる ↓ ④ 地方に優良事業所が進出しない
- といった悪循環に陥っているとしたら残念なことです。

自由民主党長野県第二選挙区支部

むたい俊介ニュース

平成 20 年 12 月号

発行元

長野県松本市白板 2-3-30
大永第三ビル

Tel : 0263-33-0518

Fax : 0263-33-0519

www.mutai-shunsuke.jp/



「地域に人材を取り戻すために」

現在、金融危機の中で日本経済、更には地域経済は大きな混乱状態にあります。

この中であって、当面の経済対策を考えることと並行して、じっくりと将来を見据えた地域再生の在り方、日本を元気にする構造改革の在り方についても考えていく必要があります。私は、その鍵は**地域社会に人材を取り戻していくこと**にあるように思われます。地域で育んだ人材が地域で高等教育を受ける機会が得られ、働き盛りの時期を地域社会で過ごし、地域経済、地域社会を実現していくことができるような仕組みを構築していかなくてはなりません。私は、これからの真の日本の再生には地方分権社会の実現が不可欠であると考えていますが、その最大の理由は、それにより地域に人材を呼び戻すことが可能となるからです。子供たちが肉

親と離れ離れになることなく生まれ育った地域で生活ができるようになる、三世代、四世代同居も可能となり、若夫婦の子育てが容易になり、子供の数も増えます。



結果的に地域経済も、地域社会も再生、安定することにつながります。

地方から優秀な人材を東京に送り出す「出稼ぎシステム」は、開発途上国型の社会システムです。欧米でも特色のある

大学研究機関は大都市ではなく地方にあります。ケンブリッジ大学もオックスフォード大学も地方都市にあります。国会、行政機関、大企業、有名大学、大手マスコミ、皇居までが東京に集中している日本の東京一極集中体制を是正していかない限り、真の意味の地域再生はあり得ません。先進国で日本ほどあらゆる機能が首都圏に集中している国はありません。

敢えて申し上げれば、これほど東京に機能を集中させておくと、将来確実に起こるであろう東京大地震の際に、日本全体の機能が停止することにもなりかねません。地方分権は国家にとってのリスクヘッジ、危機管理そのものでもあるのです。国家が危機に瀕した時にその抱える基本的問題点が炙り出されます。今こそ、中長期的観点に立った将来のわが国あり様を考えていくチャンスなのです。



地域経済を元気にするために必要な制度とは？

「地域経済の落ち込み」

選挙区内を廻っていると、本当にたくさんの生業があることを肌で知る機会が多くなっています。それぞれの業種が、資金というものを媒介に結びつきあっていることがよく分かります。特に松本平は製造業、特に自動車産業や精密機器関連の部品メーカーが多く、最近自動車産業の不調により、部

品メーカーも大きな影響を被る実態を聞くことが多くなっています。従業員の整理も始まっています。しかし、大手電機メーカーの事例では、希望退職を募っても現在の雇用不安のご時世で希望者が少ないという実態も聞きます。

「資金パイプの目詰まり」

一方で、企業の資金繰りを支える地方の金融機関はどうなのでしょう。信用不安の中、信用枠の拡大には極めて慎重になっています。金融機関の支店を訪問して話を聞くと、「銀行の基準があり冒険をすることはできない。民間金融機関の責任の範囲を超えている。」という話が多くなっています。その一方で、信用金庫系の幹部からは、「地場の中小企業が事業をたたんだり、規模を縮小したりしてそもそも貸出先が少なくなってきた」という話も伺います。

国民の貯蓄が一五〇兆円ある国にしては、その貯蓄を国内に還流する仕組みが目詰まりしている

ように思えて仕方がありません。勢いその貯蓄は国内ではなく海外に投資され、米国の財政赤字を補てんしたり、欧米の地域開発の資金として活用されたりすることになるのです。しかし、昨今の世界経済の変調で投資が大幅に目減りし、円高でさらにそれに追い打ちをかけられています。

日本の膨大な貯蓄が国民生活を豊かにし、国内経済を活性化することに使われていないことに、素朴な疑問を感じます。



「地方銀行の自縛自縛」

過日、ある地方銀行支店の幹部

の方の話を伺いました。その方は、「銀行のスコアリングシステムが地域経済の疲弊を招いている。地域と付き合う地銀としては、リレーションという考え方が大事だが実際は機能していない。」と自己反省を述べておられました。私はこの言葉が心に残りました。企業の業績指標を数値にして示し、貸付の是非の判断材料とするのがスコアリングシステムです。一方で、リレーションシップという考え方は、その企業の経営者の理念、地元での信用、背景などを総合的に考えて貸付の是非を決める方式です。

その幹部氏は、昨今のビジネススタイルの中でスコアリングシステムが幅をきかし、地道に経営者個人と付き合い目に見えないその経営の有り様を丹念に確かめて判断を行うケースが少なくなっているというのです。その結果、日本の各地で信用収縮が起き、本来優良な企業までが資金繰りに苦慮するという状況に落ち込んでいます。思うに仕方がありません。

日本の各地域に投資されない金は、世界を廻り、投機資金として原油価格を上げたり、穀物市況を上げたりして、世界経済の波乱要因となっています。サブプライムローンに端を発した今回の金融危機も、大量の投機資金が、スコアリングシステムの一連の流れをくむ「格付け機関」の優良格付けに幻惑され米国に過剰に流入したことが発端です。スコアリングが極めて大規模な形で誤って行われたのです。

地域社会の中で足で稼いで個々の企業の信用力を吟味するリレーションシップは、手間のかかる作業です。それができるのは地域に密着した地方金融機関です。その地方金融機関までが、グローバルスタンダードに巻き込まれ、スコアリングシステムの呪縛のなかで呻吟し、地域経済の潤滑油の役割を果たし得なくなっているとしたら残念なことです。

我が国の経済構造を底堅い内需主導のものに転換していくことが現在求められています。それを下

支える金融機能は極めて大切で、この二十年近い試行錯誤の中で、地域経済を長い目で見て育て上げる本来の地方金融機関の役割に見合った貸付基準を編み出していくべき時期ではないでしょうか。それが健全な地域経済再生の金融技術的側面の大きなチャレンジであるように思えてなりません。

政治の役割は、国民の皆様の生の声を受け止め、それを制度として実現していくところにあります。私も微力ながら、そのために汗を流す所存です。



むたい俊介プロフィール

- **氏名**
務台 俊介（むたい しゅんすけ）
- **生年月日**
昭和 31（1956）年 7 月 3 日
- **本籍**
長野県安曇野市（旧：三郷村）
- **学歴**
松本深志高校卒業 東大法学部卒業
- **趣味**
まち歩き、スキー、テニス、囲碁
- **座右の銘**
一期一会
- **家族構成**
妻（松本市出身）、男子二人
- **私の強み**
(1) 安曇野で生まれ育った信州人。
(2) 国内外に広がるネットワーク。
(3) 即戦力。政策・企画実現力。

● 主な職歴

- 昭和 55 年 旧自治省入省
茨城県総務部長
地方分権推進委員会参事官
総務省消防庁防災課長
総務省調整課長
大臣官房参事官
- 平成 19 年 自治体国際化協会
ロンドン事務所長
- 平成 20 年 8 月 総務省退職
自民党長野県第 2 選挙区支部長



皆様の声を真摯にうけとめ、
国政改革に生かします。



安曇野の田圃の稲わらの上で兄弟
従兄弟と（向かって左側が務台俊介）



幼少の頃、大町市内の住宅の庭で、
弟の行水を見守る務台俊介